

<前回：キリスト教思想と心理学1>

現代：「心を科学する」時代。これは、現代において急に始まった動きではなく、それは19世紀に遡る実証的な心理学、あるいは深層心理学・精神分析学において開始されていた。この19世紀の流れから、宗教心理学や牧会心理学・牧会カウンセリングなど、キリスト教との接点が構築されてきたのである。

3. 19世紀からの「心の科学」の前史。現代の実験心理学、認知科学、脳科学と、キリスト教思想との接点として、精神分析学を取り上げる。

(1) 心を科学する時代への道のり

4. 19世紀：近代的学問の研究成果は、キリスト教神学にも無視できないものとなった。その焦点は、歴史研究に基づく聖書学であったが、ちょうど自然科学に加わろうとしていた心理学(19世紀後半から20世紀)も宗教をその研究対象としつつあった。

5. キリスト教思想にとっても、心理学の知見は20世紀後半には積極的な意味が自覚される＝牧会心理学や牧会カウンセリングの登場。

6. 魂への配慮(ケア)という考え自体は、キリスト教の初期に遡ることができるが、それが、牧会カウンセリングとして認知されるようになったのは、1920年代以降。

ティリッヒ：アメリカ亡命に先立つフランクフルト大学時代に、フランクフルト学派の思想家の影響で精神分析学に関心をもつ。アメリカでのユングやフロム、そしてカレン・ホーナイ、ロロ・メイらとの交流を通して、牧会心理学、牧会カウンセリングに関する神学的論考として結実(1950年代)。

7. パネンベルク：『人間学 — 神学的考察』(教文館)も現代心理学の動向に強い関心を示していた。

8. しかし、この時期までのキリスト教神学において視野に入れられたのは、主に精神分析学や発達心理学の理論である。

(2) 精神分析学の問題

A: フロイト

宗教的象徴→心の内的な統合、心の内と外の媒介

夢の象徴：夢判断(解釈)と欲望→意味と力

1. 無意識の発見(?)の意義 cf.デカルト主義

2. フロイトの近代主義：科学としての心理学

心理現象の因果的見方・遡及的見方(アルケオロジー)

意識は無意識と連続的に、力動的につながっている

病・症状(結果) → 無意識の抑圧(原因)

3. 心のモデル(局所論) → 経済論(力学的エネルギー論) + 解釈学
力と意味

意識/前意識/無意識、自我/エス/超自我

7. 治療のためのモデル化

8. 神経症 → 抑圧理論

抑圧されても消滅しない → 症状：無意識内容の代理形成、置換・圧縮

9. 夢：欲動 → 夢を生み出すエネルギー＝無意識的欲望 → 夢の生産・欲望の充足
検閲：圧縮・置換・形象化・二次的加工

10. エディプス・コンプレックスと性欲モデル

11. 神は投影である / 宗教は幻想である (還元主義的解釈学)

- ・ 幼児期に形成された父親イメージの自然への投影
- ・ 集団的な強迫神経症としての宗教

12. 近代人の宗教からの自立、啓蒙の勧め

↓

宗教的に機能する心理学 (カウンセリング)

しかし、カウンセリングは宗教の代わりとなり得るか？

15. モデルか実在か？ 類型の実体論化の危険。

内省と類推という方法論と心の実体化が結び付く。

B : ユング

1. 「個人的無意識」(personal unconscious) と 「集合的無意識」(collective unconscious)

2. 患者の夢のイメージと古代の神話のイメージとの有意味な平行関係 → 集合的無意識

3. 心のモデル：意識・自我 / 無意識 (個人的 / 集合的) → 自己

4. 集合的無意識の内の元型 → 象徴・イメージ

外的環境との適合のために種に備わった生命エネルギーの形態化のパターン

10. 「自己実現プロセス」 = 個性化 (individuation) (1) 自我の確立 (2) 無意識との統合

自我・意識と無意識の領域が統合に、完全な全体としての自己 (自己の全体性) が完成して行くプロセス

15. 渡辺学『ユングにおける心と体験世界』春秋社、1991年。

・ 「心の現象学」：コンプレックス論と元型論において問題になっていたのは、むしろ世界そのものの構造ではなく、連想の枠組や空想や認識の構造、つまり、広い意味での無意識的構想力であったこと。

↓

・ ユングの後期思想、意味実在論：人間の心理そのものではなく、むしろ、世界の根本的なあり方であり、それと人間の心との関わり。

16. 「心」は実体 (時間空間的に局所化される物的な存在) か？ 精神分析学における心

の局所モデルは、「心」の記述としてどの程度適切か？

有機体的な身体との関係性は？

4. キリスト教思想と心理学 2

・ 心：モノ的な実体ではない、しかし、モノと同様に時空の制約を受けている。

北欧神話のエピソード。もっとも足の早い存在は？ 最速の神？

近代の心 (魂・意識) の実体論の問題性

(小坂井敏晶『責任という虚構』東京大学出版会)

↓

10. 創発理論と次元論 (12/10)

・ ルーマン：心的システム。意識システム。

「意識システムはオートポイエーシス的にはたらいっている、とルーマンは主張している。このことは、心的システムが回帰的過程のなかで自分の構成要素を自分の構成要素から継続的に産み出し、そのような仕方でも自分を統一体として自己産出し自己保存しているということを意味している。心的システムに特殊な要素を、ルーマンは思考内容ないし表象と

呼んでいる。思考内容ないし表象は出来事であり、したがって現われた瞬間にたちまち消え失せてしまう要素である。思考内容は、現われると、その次の瞬間には姿を消し、新しい思考内容によってとって代わられる。・・・意識は、意識状態から意識状態へ、思考内容から思考内容へと浮動する。」(ゲオルク・クニール、アルミン・ナセヒ『ルーマン 社会システム理論』新泉社、70)

・近代の人間論：「神と人間」から「動物と人間」へ。

(1) 霊長類研究から人間へ

1. 霊長類研究：「脳科学と心」から展開される認知科学の研究に隣接する。

・近代以前の間人学が人間と神との比較(関係と差異)を主題としてきたのに対して、近代以降の間人学の特徴は、人間を動物との対比によって論じる点に認められる。

↓

近代の心理学、あるいは現代の実験心理学において人間と比較されるのは、さまざまな動物であり、人間に近い存在である霊長類は特に重要。

2. 「動物との距離の近さへの再認識が進むと、宗教心は人間特有のものであるというような考えにもメスがはいていくことになる。哺乳類、その中でも人間に近いとされる霊長類などが、神やたましいのような目に見えない存在を感じているかどうかは分からない。死後の世界について考え得る脳の仕組みがあるかどうかはまだ分からない。目下の問題は、人間の宗教心というのは、他の心の動きと異なる独自の働きをもつものである、というふうに考えるのが適切かどうかである。」(井上順孝「宗教研究の新しいフォーメーション」、井上順孝編『21世紀の宗教研究——脳科学・進化生物学と宗教学の接点』平凡社)

3. 人間における豊かな精神的営みの場である芸術をめぐって。

「チンパンジーがなぜ表象を描かないのか、という問いから、ヒトはなぜ描くのか、のヒントを探ることにした」として開始された「芸術認知科学」(齋藤亜矢『ヒトはなぜ絵を描くのか——芸術認知科学への招待』岩波書店)。

「チンパンジーたちも言語を習得することで、世界が少しカテゴリー化され、ある程度の記号的な見方をしているのかもしれない」と言われるようなヒトとの類似性を発見するとともに、「チンパンジーは、今ここに『ない』ものを見るよりも、今ここに『ある』ものをしっかり見ている。だからチンパンジーは、将来を考えて絶望しない。」

・では、宗教に関しては？ 宗教に関わる霊長類との比較研究は、芸術以上にハードルが高いというべきかもしれない。しかし、そのハードルも超えられないものではないように思われる。

3. 「チンパンジーを見続けて40年が経過しました。……そして今ようやく、人間のすばらしさに気がついたと思います。想像するちから、希望をもつのが人間です。そして、その想像するちからによって、人間は心に愛を育んできました。」(松沢哲郎『分かちあう心の進化』岩波書店)

(2) AIあるいはロボットは何をもたらすか

4. AI(人工知能)やロボットをめぐる研究領域：「脳科学と心」の問題に対する第二の隣接分野。

・2010年代からの第三次A Iブーム：ビッグデータとディープラーニング（統計処理に基づく分類によるパターン認識）。

1950年代の第一次ブーム：「論理」をキーワード。

1980年代第二次ブーム：「知識」をキーワード。にした一九八〇年代の第二次ブーム・コンピュータの高性能化。その過程で、脳科学との関わりが顕わになりつつある（西垣通『ビッグデータと人工知能——可能性と畏を見極める』中公新書）。

5. 「弱いA I」（将棋や碁などの特定の目的に特化した「専用人工知能」）と「強いA I」（人間のすべての認知能力を所有し自律的に振る舞うことができる「汎用人工知能」）

↓

A Iの第三次ブームでは、人間のような知能をもつ、さらには人間以上の知能をもつコンピュータが話題——チェス、将棋、囲碁のプロ棋士を打ち破るソフトの登場——、「強いA I」が実現可能であるかのような楽観論。

6. レイ・カーツワイルによって有名になった「シンギュラリティ」（技術的特異点）説の再評価。この延長線上に位置する。それは、2045年に、コンピュータやインターネットをめぐるテクノロジーの進歩が特異点に到達し、それによって人間の生活が後戻りできないほど変容してしまう（人工知能の能力が爆発し「不死」が可能になるとか、人間の低い知能では理解不可能になる）との予言であり、第三次A Iブームの中で、再度注目されるようになった。ここで指摘したいのは、これが、脳科学とも結びついている点である。

7. 西垣はシンギュラリティ説には批判的。シンギュラリティ説をめぐる海外では活発に議論。ニック・ポストロム『スーパーインテリジェンス——超絶A Iと人類の命運』日本経済新聞出版社、マレー・シャナハン『シンギュラリティ——人工知能から超知能へ』N T T出版。

・シャナハンは、シンギュラリティ説について踏み込んだ、しかも冷静な分析を行っている。「いつ実現するか、そもそも実現するかどうかは別として、特異点の概念そのものは知的な意味でかなり興味深いものだ。」

8. 西垣。深層学習が人々にアピールしたのは、それが統計処理に基づくパターン認識の精度を向上させたからだけでなく、脳の働きにかなり近づいているとの印象を与えたから——深層学習におけるニューラルネット（神経細胞網）と呼ばれるモデルの使用など——。実際、脳の働きを分析し、その結果をコンピュータ上に再現するという巨大プロジェクトが、アメリカやヨーロッパで進みつつある。

・脳の完全コピーに基づく脳エミュレーション（移し替え）という構想は、脳科学とA Iとの結びつきが本格化しつつあることを意味。

・サイバネティクスの不死（脳エミュレーションによって身体の死の後にも人格をコンピュータ上で存続させる）について言及。

このS F的な話が神学の周辺に迫りつつあること。

デトレフ・B・リンケ「神が記憶を与える：神経科学と復活」、ノリーン・ヘルツフェルド「サイバネティクスの不死 対 キリスト教的復活」T・ピーターズほか編『死者の復活——神学的・科学的論考集』（日本キリスト教団出版局、2016年）。

9. ロボットをめぐる、より古典的な問題。鉄腕アトムのような心をもち感情を理解するロボットは可能か。

10. 西垣。生物と機械とのあいだの境界線は、深層学習などによって架橋できるようなも

のではないことを指摘。

コンピュータは、プログラム(過去)に依存して作動する機械であり、ビッグデータ時代になってもこの基本は変わらない。この意味で、機械は他律システムであり、それに対して、生命や心は、自律システムであることを特徴としている——人間の主体的自由や倫理的自律性はこれに依拠する——。ロボットが感情、心、人格をもつことができるかという問題は、少なくとも当面は否定的に答えることができるだろう。

そもそもロボットには自律システムとなるのに不可欠な「身体」が厳密には存在しない、つまり他律的に作動する開放系であるからと言い換えてもよい。確かに、人間も身体を介して環境との間で情報やエネルギーの交換を行うという点では開放系であるが、それは、身体や心が閉鎖系であることに基づく開放性であって、そこにロボットとの根本的な相違がある。

将来的に、ロボットも巧妙なプログラミングの結果、あたかも心や感情をもつように振る舞うようになり、人間との見分けが困難になることはあるかもしれないが(荻阪直行編『ロボットと共生する社会脳——神経社会ロボット学』新曜社)、超えるべきハードルは想像以上に高い。

↓

「あたかも心や感情をもつ」と「心と感情をもつ」とは同一か?

11. AIやロボットが人間を超えることができるのか、あるいは人間のような心をもつことができるのかについて、それを肯定するにせよ否定するにせよ、AIやロボットとの人間の比較が人間の固有性の理解を深める上で有益なことは確かである。

↓

12. 日本宗教学会・2019年度の学術大会。公開シンポジウム「宗教と科学の新たな世界」。著名なロボット研究者である石黒浩(大阪大学教授)の「ロボットと宗教」基調講演が行われ、続いて、活発な質疑がなされた。このシンポジウムは、日本宗教学会『宗教研究』別冊「学術大会紀要号」(第93巻別冊)に掲載予定。

石黒講演のポイントの一つは、AIやロボットとの対比が、人間理解を深めるということ。

13. 人間の心にとっての身体の意義。

人間あるいは人間の心に自己参照性構造

これは、参照すべき参照点を必要とする。

参照点としての身体

自分の身体、所有か使用か。

(3) 心を科学する時代におけるキリスト教研究

13. 現在のキリスト教思想において、認知科学に強い関心を示している神学者として、マクグラスを挙げることができる。

- ・「啓示がどのように理解されようとも、啓示には人間の認知と知覚が伴う。そして、この認知と知覚によって、実際にあるがままにふさわしい仕方で啓示は認識されるのである。……啓示は自然界や物質界を迂回するものではない。……解釈と自己化のプロセスにも人間の知覚が関与しており、それを神学上の都合で簡単に排除することはできない。」(A・E・マクグラス『「自然」を神学する——キリスト教自然神学の新展開』教文館)

14. マクグラスは、有名なバルトとブルンナーの自然神学論争を再考。
「エーミル・ブルンナーがカール・バルトよりも、神学と認知神経心理学にとって生来の対話相手であったかもしれない」との評価。

15. マクグラスのブルンナー論。Alister E. McGrath, *Emil Brunner. A Reappraisal*, Blackwell, 2014.

認知科学との関わりでブルンナーに注目するのはマクグラスだけではない。次の論考は、認知科学との関連でブルンナーの「神の像」論を取り上げている。Taede A. Smedes, “Emil Brunner Revisited: On the Cognitive Science of Religion, The Imago Dei, and Revelation,” in: *Zygon*, vol.49, no.1 (March 2014), pp.190-207.

<参考文献>

1. John Bickle (ed.), *The Oxford Handbook of Philosophy and Neuroscience*, Oxford University Press, 2009.
2. 宮田光雄『ボンヘッファーを読む——反ナチ抵抗者の生涯と思想』岩波書店、1995年。
3. 芦名定道「脳神経科学からキリスト教思想へ」（京都大学キリスト教学研究室『キリスト教学研究室紀要』第2号、2014年、1-14頁。
<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/173565>